The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史上より見たる満州
Author(s)	矢野, 仁一
Citation	懐徳. 1932, 10, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88860
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

歴史上より見たる滿洲

矢野仁一

滿洲は元來支那の本土でなくて、滿洲人或は正確に言へば滿蒙人の本土であつたことは、史記燕召公世家の太史公論贊に、戰國時代の燕の國は北方は蠻貉に迫つてをると見ねてをるにても知られる。燕の將軍秦開が東胡の人質となりその信用を得たのに乘じ、歸つてから東胡を襲破し、東胡の退却した千餘里の地の外邊において長城を築いたことは史記匈奴傳に見ねてをるが、この長城は造陽より襄平に達したといふことである。

造陽は今の懷來近傍で襄平は遼陽だから、熱河省の南部、遼河下流の流域などは東胡の土地であつたと見ねる。漢の高祖の時燕人衛滿が魋結蠻夷の服裝をなして胡地を通り、朝鮮に走り、燕齊の亡命者を役屬して、古朝鮮王を逐ひ、獨立して自ら朝鮮王と稱したことは魏志、東夷傳所引魏略に見ねてをる。當地北朝鮮は古朝鮮で、これは箕子の封せられた國といふことになつてをり、當時箕子から數へて四十一代目の子孫が王となつてゐたといふことであるが、それは信ぜられぬ事でも、支那人の亡命者、移住民などの建てた國であることは明かで、既に支那人が比較的多く居住してゐたやうである。

遼河の流域は却つて支那人は少なく依然蠻夷の國であつたことは、この魏略の記事に依つて想像されるのである。今日滿洲三千萬の人口の大部分は支那人であるが、それは昔から漸次に增大してさうなつたのではなく、清朝時代になつて急にさうなつたのである。清朝でも初めは支那人は極めて少なかつた。乾隆、嘉慶頃から漸次多くなり、道光、咸豐を經、光緒末になつて益々增加したのである。極めて急激にさうなつたのである。悠久なる歷史から眺むれば極めて近時の現象に過ぎない。清朝以前においても支那の勢力は屢々滿洲に進出した。しかしまた屢々驅逐され、繼續的に發達して今日に至つた譯ではない。進出しては驅逐され、また進出しては驅逐さるゝといふのが、滿洲における支那人の歷史である。さういふ譯で滿洲における支那人の數は昔ほど少なくして時代を下るに隨つて多くなつた。漢より唐の時は多く、唐より明の時は多かつたといふことはないやうである。數ばかりでなく支那の勢力の及んだ範圍でも昔ほど狹く後ほど廣くなつたといふこともない。昔から支那の勢力の及んだ範圍は遼河の流域を出でない。今日我々は滿洲の名に依つて理解する東三省、奉天省、吉林省、黑龍江省を包含する廣大なる地域から言へば、實にその一部分に過ぎないのである。却つて戰國時代の燕から秦漢にかけた時代に於ては長城なども遼陽及び北朝鮮までもその支配に歸した程で、遙かに唐代よりも廣かつた。長城が山海關の今の地位に設けられて華夷の界をなすに至つたのも漢魏の際だといはれ、唐の領土は南北は漢に劣らないが、東は到底及ばなかつたと新唐高地理志にも言つてある。

さういふ譯だから滿洲の歷史は滿洲において支那の勢力は漸次增大發展して今日に至りたる歷史と考へるよりも、滿洲人域は滿蒙人が、その支那に對する侵寇を防禦するため、屢々その故土たる滿洲の一部、遼河の流域に進出したる支那人の勢力を驅逐してその故土を恢復するがために努力したる歷史を考へる方が自然である。

漢の武帝は衞滿朝鮮を滅ぼし、樂浪等四郡を置いた。樂浪は平壤を中心とせる郡で、古朝鮮以來支那人亡命者移住民などの多く聚屯せる地方であるが、臨屯郡や眞番郡は樂浪の東或は南にある夷貊の部落に就いて置いた郡であるから、維持ができず間もなく廢止され、玄菟郡も廢止はされなかつたが、その郡治は咸鏡南道の沃沮城から遼東の高句麗縣に移さゞるを得ざるに至つた。前漢の時十八もあつたといふ遼東郡の縣令、十四もあつたといふ遼西郡の縣令などは皆支那人の任命されたとは考へられない。唐の時ですら高句麗を滅ぼして、安東都護府を置いた時にも、その下の都督や州の刺史や、縣の令などは皆高句麗人を任用したといふことである。遼東二十七萬餘人、遼西三十五萬餘人の人口などもどれほどまで支那人であつたか疑はれる。後漢の時になると、遼東の縣は八九縣に減じ人口は八萬人に減じ、遼西の縣は五縣に減じ、人口また八萬餘人に減じた。前漢時代數十萬の人口が大部分支那人であり、數十の縣に一々支那人が任命されし程支那の政治が及んだならば、後漢時代になつて滿洲人の高句麗や、準蒙古人の烏丸、鮮卑などの侵逼があつたとしてもかうも俄かに減退することは考へ

られぬことである。後漢時代になつて縣數戸口が減じたのみでなく、最も高句麗の衝に當つた玄菟郡の郡治玄菟城は高句麗縣より更に今の奉天近傍に移さるゝに至つた。後漢の初め遼東郡を山東に隸屬せしめしことは晉蕃地理志に見ゐてをるが、遼西、熱河地方に烏丸、鮮卑の勃興したゝめ、直隸の幽州より支配することはできなくなつたゝめであらう。その後遼東郡を再び幽州に屬せしむることになつたが、それは光武帝が烏丸を招撫懷柔して、烏丸を中心として遼東屬國といふ羈縻屬國を置いた結果であるが、遼東屬國は既に支那の勢力が直接に遼西地方に行はれなくなつたゝめ、恩賞利益を以て纔かに羈縻するといふ方針により、その自治自主を認めたるもので、支那の勢力の減退を語るものである。それ故どれ程遼東において支那の勢力が恢復されたかは疑はれる。當時祭彫といふ名太守があり、聲名北方に暢り、西は武威より東は玄菟、樂浪に及び、胡夷皆來り內附し、野に風塵なく、悉く緣邊の屯兵を罷めたとか、濊貊倭韓萬里朝獻したとかいふ記事は歷史に見ゐてをるが、後漢書の高句麗傳などを讀んで見ると、その侵寇は甚だしかつた。

後漢末の張作霖ともいふべき公孫度が襄平卽ち遼陽に據り、玄菟、樂浪二郡を併領し、子公孫康の時、樂浪の南界を拓き、帶方郡を置き、父子孫三代に亘り、四十餘年間南滿北鮮の雄國と稱せられたが、公孫氏の國は恐らく滿漢民族の混合國家で、さういふ獨立國家が遼河流域に起つたといふことは、支那の勢力が遼西、熱河における烏丸、鮮卑の勢力によつて遮斷され十分に行はれざるに至りし結果

であらう。

三國時代魏の司馬懿は公孫氏の國を滅ぼし將軍毋丘儉は高句麗を破り、その時の都丸都城を陷れ支那の勢力は一時遼東から朝鮮に振ひ、それから西晉にかけ、南滿北鮮は支那の郡縣となつた譯であるが、その內容はどれ程支那の勢力を示したものであるかは疑はれる。長城が今の地位に引込んだのは既に漢魏の際だといふことは前述の通りである。高句麗は魏軍に國都を陷れられしも、魏軍の引き上げし後間もなくこれを恢復し、西晉になつて益々强盛となり、西晉末には漢以來北鮮支那文化の淵藪であつた樂浪郡を滅ぼし、また玄菟郡を併せ、その西境は今の奉天に接した。鮮卑の慕容氏も後漢より三國を經、西晉に入つて益々强盛となり、遼東郡を侵し、東晉匆々遼東郡を滅ぼし、西晉末以來支那の滿鮮における唯一の根據地遼陽以南遼東半島も奪はれ、支那の勢力は一たび全く滿洲より一掃せらるゝに至つた。支那の勢力が一掃せられし後、高句麗の勢力と鮮卑慕容氏の勢力とは滿洲において相對峙抗爭することゝなり、遼東、玄菟の領有權を爭つた。慕容氏の勢が盛んであつた前燕の時、高句麗は玄菟城を取られ、その都丸都城を陷れられ、都を國內城に遷さなければならなくなつた。高句麗はその後遂に平壤に遷都するに至つた。高句麗と同種族で長春の農安にあつた夫餘國も前燕に滅ぼされた。その後鮮卑の勢衰へ、後燕の時、高句麗は玄菟城、遼東城を恢復し、その西境は遼河に及ぶことゝなつた。南北朝の時、高句麗は南滿より朝鮮に跨がる大國となり、西は遼河で北朝の領土と接壤し

た。

隋の南北朝を統一せし頃は高句麗の最も强盛な時で、その西境は遼河で、隋の遼西郡に接した。隋の高祖の時から煬帝の時にかけ前後四回の高句麗征伐は全く大失敗に終つた。唐の太宗の高句麗征伐も同樣失敗に歸した。高宗の時、新羅と連合し、百濟を滅ぼし、ついで高句麗を滅ぼした。二たび支那の勢力は遼河流域に進出し一時朝鮮に及んだ。然し滿洲民族の渤海は牡丹江の流域から勃興して松花江流域より鴨綠江に及ぶ一大强國となり、奚、契丹の準蒙古種族遼河上流シラムレン、ラオハ兩河の流域より大凌河の上流に及ぶ地方に占據して勢漸く盛んとなつた。唐の滿洲における領土は遼河流域に止まり、鴨綠江下流地方より興京を經、開原に至る線は渤海との境界線であつた。遼西には柳州を置き、奚の地に饒樂都督府、契丹の地に松漠都督府を置きしも都督には奚、契丹の首渠を任用し、姓名、官爵を賜ひて慰撫に務めしことは新舊唐書契丹傳に見ねてをる。安祿山が大軍を率ゐて契丹を征伐し大敗してからは殆んど南滿洲遼河流域には支那の勢力は及ばぬやうになつた。唐は高句麗を滅ぼし安東都護府を置いてその地を統轄せしめたが、その府治は最初の平壤より遼東故郡城今の遼陽に、遼東新城今の新民縣近傍に、平州今の山海關内の永平即ち盧龍縣近傍に、遼西故郡城今の義縣近傍に轉々として移轉し、遂に至德年間に至つて廢止さるゝに至りしことは、その間の消息を語るものである安東都護は支那人であつたが、その下の九人の都督、四十二人の州刺史、百人の縣令などは皆高句麗

人であつたことは新舊唐書に見にてをる。遼河流域既に然りであるから黑龍江流域や松花江流域などに支那の勢力の及ばなかつたのは當然で、當時唐が黑龍江地方に據れる黑水部靺鞨の大部落について黑水府を設け、その頭目を黑水經略使となし、姓名を李獻誠と賜ひしことは新舊唐書に見にてをるが、それはもとより羈縻の關係に過ぎなかつた。松花江の粟末靺鞨部から起つた渤海の勢力を牽制するためで、支那の勢力が實際に及んだ證據にはならない。唐末には支那の勢力は再び滿洲より一掃せられた支那の勢力が一掃せらるゝと渤海の勢力と契丹の勢力とは滿洲に於て相對峙抗爭したことは丁度東晉初めの形勢と同樣であつた。契丹の勢力强く渤海は滅ぼされたが、黑水靺鞨部から女眞種族が勃興し、契丹を滅ぼして一時北支那を併呑したが、蒙古の勃興に依つて滅ぼされ、滿洲は蒙古の勢力下に立ち、明の蒙古を討伐してこれに代るに及び、支那の勢力は三たび遼河の流域に進出した。明はこの遼河流域を遼東都指揮使司を置いて支配した。漢唐時代同樣軍事殖民地或は軍事策源地ともいふべき地方で邊牆外に占據したる滿洲民族或は滿蒙民族の勢力の消長に隨つて、その境域は伸縮常ならざる有樣であつた。支那內地とは全然異る特殊の地域であつた。邊牆の地位は明の一代において屢々變つてをる。如何に明は滿洲においてその地位を維持するに苦心せるかは分かる。人口も全遼志といふ明末の書に據ると、三十八萬餘人あつたといふが、その中どれ程まで支那人であつたか分からぬが、前漢代に遼東遼西合せて六十餘萬人あつたといふのに、却て少ないのはどういふことだらうか。滿洲

における明の唯一の領土ともいふべき遼河流域は此の如き有様であつたが、邊牆以外の滿洲の大部分は如何であつたかといふに、それは全然明の勢力の及ばざる所であつた。永樂帝の時松花江の流域に建州衛、黑龍江の流域に奴兒干衛や奴兒干都司を置き、女眞種族の頭目阿哈出を建州衛指揮使となし姓名を李思誠と賜ひしこともあるが、唐が黑水靺鞨部の頭目を黑水府都督となし李獻誠といふ姓名を賜ひ、契丹の頭目を松漠府都督となし、李盡誠といふ姓名を賜ひし故智を襲ひしものであることは疑ふべくもない。唐ならば國姓は李であるから、李獻誠、李盡誠といふ姓名を賜ひしことは分かるが、明は國姓が朱であるのに、李思誠といふ姓名を賜ひしことはをかしい。奴兒干都司の設置もその地方頭目の恩賞目當ての意見によつたものに過ぎぬ。その長官たる都指揮使なども康旺といふ韃靼人で、支那人でなかつた。さういふ譯が羈縻の關係で明の勢力が實際及んだ譯ではない。永樂帝の時太監亦失哈等が巨船に駕して奴兒干地方に至り、各部酋を招撫したといふことも、その後も宣德の時にかけ屢々使を遣はしたといふことも、永樂宣德時代に行はれた太監鄭和の南洋諸國招撫、司禮少監侯顯の西番、尼八剌、榜葛剌諸國の招撫と同樣、兵を異域に耀かし、中國の富强を示すといふことは主要の目的で、奴兒干地方を異域と考へ、この異域までも兵を耀かすといふ永樂帝、宣德帝の考へを示すものに過ぎぬ。たとへ明の勢力が實際に及んだとしても、それはその時限りで、その後は實際に異域となつて仕舞つた。異域といふよりは敵地といふ方が適當な位になつて仕舞つた。

明の建州衛と稱した滿洲民族が松花江の源流地方長白山東北地方より勃興するに及び明の遼河流域における勢力は次第に壓迫せられ、明末に至つて遂に驅逐せらるゝことになつた。これで滿洲において支那の勢力は最後に一掃せられた譯である、遼河流域にをつた支那人は或は朝鮮の平安北道に奔竄し或は山海關内に逃遁した。清朝は山海關の譏察を嚴にし、遼東から吉林にかけて柳城邊牆を造り、邊門を設けて支那人民の濫入を禁じた。長城や、明代の邊牆は支那人が滿洲人蒙古人の支那侵入を防ぐために設けたものであるが、清朝の柳城邊牆は反對に滿洲人が支那人の滿洲濫入を防ぐために設けたものである。康熙時代の初めの奉天の形勢を論じた張尚賢といふものの論文に、遼東、遼西は荒城、廢堡、敗瓦、頹垣の連續で、沃野千里土あつて人なしといふ有樣であつたことを叙述してある。奉天遼陽、海城の三處のみは稍々府縣の規模をなすも、蓋州、鳳凰城、金州などは住民數百人に過ぎず、鐵嶺、撫順は流徒諸人のみで耕種もできないと言つてある。滿洲には殆んど支那人は居らなかつた。清朝は滿洲を以て祖宗發祥、肇基の地、國家根本の重地となし、滿洲旗人の生計を維持すべき特別の地域となし、特別の官制を設けて支配した。支那の各省は總督巡撫を設けて支配したが、滿洲は將軍副都統を設けて支配した。五部侍郎を設け、また滿洲にをる支那人を管理するために奉天府府尹を設けたが、いづれも滿缺で、滿洲人に限つて任命せらるゝ官職であつた。段々滿洲において州縣官も任命せらるゝに至つたが、乾隆二十七年の上諭によると、これも滿缺であつて、支那各省の州縣官と同

一でなかつた。清朝は旗民不交產章程といつて旗人の土地と人民卽ち支那の土地とは互ひに賣買讓渡を許さずといふ條例を設けて旗人の土地を保護した。旗人の土地卽ち旗地は清朝が旗人の生計を保護し、子孫を養贍するため給與したるものであるから世襲財產たらしめんとしたものである。咸豐二年卽ち西曆一八五二年畿輔地方において旗民不交產章程を廢止したが、東三省卽ち滿洲においては依然これを保存した。さういふ譯で清朝は滿洲を國家根本の重地となして滿洲人の生計を維持すべき特別の地として保存したい考へであつたが、それはなか〳〵六かしかつた。滿洲旗人は後には非常に多くなつたが、初めは少ない。滿洲人の先代たる女眞人も初めは非常に少なかつた。契丹人は女眞は萬に滿たず、萬に滿つれば敵すべからずといつた話が遼志に見にてをる。清の太祖努爾哈赤の時、旣に八旗の組織は出來上つたが、一旗の兵數は七千五百人だから八旗六萬人でそれに八旗に編制されなかつた壯丁も數萬人位あつたとして、當時の滿洲人の數を想像して見れば精々四五十萬人に出でなかつたでないか。さういふ少數でひとり滿洲ばかりでなく支那の各地に轉戰し、支那統一の大業を全うしたのみならず、禁旅八旗として北京の守備に任じ、また駐防八旗として支那各地の紡禦に當つた。滿洲に殘つた駐防八旗は非常に少數であつたことは想像される。それにこの滿洲人は騎射を專業とし、農工商業には極めて不得手であつた。農業に從事したものは多少はあつたけれども、どつちかといへば餘り親しみはなかつた。その點では金の時の女眞人と同樣であつた。それに戰勝國の人民として自か

ら鋤犂を手にするより支那人を使役して小作料に衣食するを好んだ。商工業には全然從事しなかつた商業に從事することは清朝一代を通じて禁ぜられてゐた。愛琿地方の滿洲人について研究した露西亞のシロコゴロク氏によれば極めて粗末な毛氈製造や鍛冶などを除けば滿洲人の間にはこれといふ工業が發達しなかつた、繩を拵へたり多少の皮を拵へたりすることは知つてをるがそれはたゞ家庭用のものに止まつたといつてをる。さういふ譯であるから、滿洲人だけでは滿洲の開發開拓は思ひもよらなかつた。これでは滿洲は國家根本の重地だの、旗人の生計を保護するため保留しなければならぬだのといつたところで仕方がなかつた。それで清朝は早くから遼東招民開墾條例を發布し、支那人の農業勞働者の滿洲移入を奬勵した。それと共に商人も入込むやうになつた。康熙帝の時北滿洲に侵入した露西亞の勢力を擊退するために當時の滿洲の兵力、經濟力を動員して露西亞と戰つたが、その結果滿洲の政權は擴充し、滿洲は今日あるが如き滿洲になつたのである。滿洲における政治組織は大きくなるに隨ひ商工に從事する支那人も必要となり、手工業勞働者、御用商人、小賣商人、從者奴僕として支那人が滿洲に入込む機會は益々多くなつた。清朝は旗人の生計を保護するため支那人を利用することを欲したるも、これを脅かすに至るやうに支那人をして經濟的勢力を滿洲において持たしむることは願はなかつた。滿洲人を利用することを欲し、利用せらるゝことを欲しなかつた。然しそれは無理な願ひであつた。清朝は希望は事實との喰違ひ、齟齬に當面し、何とか彌縫したい調節したいと考へ百

方努力した。或は禁令を繰返へしたり或は官制を改革したり隨分努力した。然し凡ての努力は水泡に歸し、支那人の移住は益々增加し、滿洲における支那の色彩は益々濃厚になつた。光緒元年即ち西曆一八七五年の官制改革もその一つの努力であつた。盛京將軍崇實の上奏に基づき、盛京將軍はこれまで滿洲旗人を管理して民人即ち支那人を管理しなかつたのを改めて、支那各省の總督の體制に倣つて、盛京全省の文武の全權旗人民人統治の全權を掌握せしむることになつた。また奉天府府尹もこれまで民人即ち支那人だけを管治し、旗人を管治しなかつたのを改めて支那各省の巡撫の體制に倣ひ將軍同樣、旗民文武の全權を管掌せしむることになつた。國際聯盟派遣調査委員唯一の滿洲通として活躍しつゝある米國のウォルター、ヤング氏はその著「日本の滿洲における地位」において、光緒元年即ち一八七五年のこの改革を非常に重大視し、將軍は支那各省の總督と同樣になつた、滿洲は支那の各省と同樣になつた、滿洲は北京政府と一層緊密に結びつけらるゝに至つた、滿洲は支那の完全なる領土になつたと論じてをるが、支那各省の總督は滿洲人でも支那人でもなることができる滿漢兩缺であるに反し、將軍は奉天府府尹と共に滿洲人でなければなることができない滿缺であつた。これでは將軍は滿洲旗人だけを管治し、支那人を管治しないでも、支那人は少數であり、さうしてその少數な支那人は滿洲人のための支那人であつたから、それで滿洲における最高官憲として州縣官に對しても十分おさへがきいたのであるが、支那人は多くなりその實勢力が强くなつた當時においては最早昔の樣に

支那人を管治できない制度ではそれはできないやうになつた。それでは困るから將軍の權力を強くするため、全省文武旗民に論なく凡てその管掌に歸せしむることになつたのが、この時の改革である。それでどうして滿州は各省と同樣になつたといふことができよう。ヤング氏はまた光緒元年即ち一八七五年のやうな早い時期において既に滿洲は東三省と言はるゝやうになつてゐたことを指摘し、これまた滿洲が此の時既に支那の各省と同樣支那の完全なる領土となつてゐた證據であるやうに述べてをる。滿洲が東三省と稱せらるゝに至つたのは、ヤング氏が非常に早い時期だといつてをる一八七五年より七十數年前の嘉慶八年から既に記錄に見ゐてをる。即ち嘉慶八年西曆一八〇三年の上諭に山海關外の東三省の地に支那人民の流寓雜居して土地を私墾することは本來許されざるところで、多年來の禁例であると見ゐてをる。嘉慶十六年西曆一八一一年に編纂された大清會典圖にも盛京、吉林、黑龍江これを東三省となすとの明文が見えてをる。ヤング氏はもしこれを知つたならば一層威猛高になつて十九世紀初めから遲くも滿洲は支那の完全なる領土となつたといへると主張したであらう。然し東三省といふ名稱ができたからとて支那の各省と同樣になつたといへぬことは、その內容は全然同一でないからである。もし支那と同樣になつたとすれば、どうしてその支那の地に支那人の流寓雜居を禁ずるのであるか。譯の分からぬ話しである。ヤング氏は蒙古や新疆は支那の外藩として取扱はれたが滿洲は曾て支那の外藩として取扱はれなかつたことを以てその支那の領土であつた證據と考へてをる

やうだが、これまた外藩は支那より輕く、滿洲が外藩ではなかつたことは、直ちにその支那の領土であつたことを意味するものでなく、却つて支那より重い地であつたことを否定するものでないことを知らざるものと言はなければならぬ。殊に旗民不交産例が咸豊二年以來畿輔地方に廢されても滿洲においてなほ維持され、東三省の州縣官がなほ滿缺たりしことは、滿洲の支那と同一地域と見ることのできない有力なる證據を提供するものでないか。

然し清朝は滿洲における支那人の數は增し、民人旗人より多しといふ有樣となり、支那の色彩は益々濃厚となつたため、段々滿洲の國家根本の重地として滿洲人の生計を保護するため特別に保留しなければならぬ特殊地域であることの自信力を失うやうになつた。そればかりでない。清朝以前までは支那人は滿洲人の敵であつた。滿漢は敵對關係であつたが、清朝の時になつて支那人は滿洲人と同樣清朝の天子の赤子となつた。清朝は支那人を恐るゝ必要も理由もなかつた。滿洲人の生計を保護する必要を認めながら、支那人を排斥する禁例を勵行することはできなかつた。さうして初めは滿洲を根本、支那を末と考へたが、いつのまにか、偏僻鄙陋の滿洲より繁華富庶の支那を重んずるやうになつた。口にこそ言はぬが、心の中では支那を根本と考へ、滿洲を末と考へるやうになつた。もう一つ重大なことは日露戰爭後露西亞の續けさまの帝國主義侵略主義の滿洲侵出により、清朝は三國干涉の報酬として仕方がない運命であるやうにあきらめの心理となつた。歐羅巴のその當時の歷史の大勢から

考うれば、清朝の懇求はなくしても三國干渉が起つたことは明かであるが、清朝の君臣から考うれば清朝は懇求したから、三國干渉は起つたものと考へたのである。三國は報酬なしに干渉の如き大事を決行する筈はない、御禮は到底仕方がないものと覺悟するやうになつた。それやこれやで清朝は昔の如く滿洲は國家根本の重地であるといふ關心を失う樣になつたのである。その結果日本は日露戰爭の結果、露西亞に代つて滿洲に進出せんとする勢を示すに至つて、一九〇五年旗民不交產章程の廢止を滿洲においても適用し、越ねて一九〇七年東三省において省制を施行し、支那人の總督巡撫を任命するに至つたのである。滿洲が滿洲人の滿洲たる特殊性はこれで假死麻痺するに至つたのである。もし日本は滿洲の特殊性に關聯して發生したる日本の特殊の權利利益を主張しなかつたならばこの假死麻痺は遂に覺醒せずに眞の死永久の死に導かるゝことに至つたであらう。日本の滿洲における特殊の權利利益も米國の門戸開放、支那の領土保全を二大支柱とする極東外交に引ずられまた米國の勢力を後援と恃める支那の排日宣傳に乘せられて一時外觀上殆んど消滅せんとするが如き有樣であつたが、日本の特殊の權利利益は日清日露戰役の結果發生したものであつてこの戰役の事實が消滅せざる限り眞に消滅すべきものでないから、支那の排日は益々暴慢となり反日となり侮日となり、日本の特殊權利利益を現實的に代表し、具體的に表現せる結晶ともいふべき鐵道の權利を侵害するに至つて日本は武力を以てこれを擁護せんとするに及び、こゝに滿洲事變となり、滿洲の特殊性は衝動的の刺戟を受け遂に滿洲獨立國家の創建となるに至つたのである。